かささぎ通信　第119号

毎月第2金曜日 13：30〜15：30　　2022年　11月　11日　発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二二年十月「森三郎の作品を読む会」では、「笛」の読み比べ（『赤い鳥』1933.2）と少国民文芸選『かさゝぎ物語』［1942.8］帝国教育会出版部）をしました。その後「おどけ百人一首」（『うぐひすの謡』［1943.8 拓南社］所収）を読みました。

「笛」（『赤い鳥』一九三三年二月号所収）は『森三郎童話選集　夜長物語』（一九九六年、刈谷市教育委員会編）所収作品であり、「森三郎の作品を読む会」においてもこれまで何回も取り上げて来ました（参照・「かささぎ通信」26号、97号）。

この話は平安時代を舞台に、十二歳くらいの二人の少年の出会いを描いています。右大臣の息子の朱美が偶然立ち寄った小さな家は、数日前にショウガを買ってやったショウガ売りの少年の家でした。その子の吹く笛の音に惹かれた朱実はその笛が欲しくなり、貰ってくれるよう乳母に頼みます。当時は珍しい柑子と引き換えに貰おうとしても、少年は強く拒みますが、少年の祖母が無理矢理取上げ朱実に渡します。少年の泣き声を耳にしながら家に帰り、笛を吹いても少年の吹いたようには良い音色は出ません。笛を庭に放り出しそれなり忘れていましたが、ある朝、雪の中から笛を見つけ出した朱実は少年の泣き声を思い出します。

当日の「作品を読む会」では、笛を渡したくない少年の気持に焦点を当てて話が盛り上がりました。見た目は粗末でも、ありあわせの篠竹を切って、自分でこしらえた大切な笛です。何度も作ってやっとできた満足のいく笛であったかもしれません。少年の境遇は分かりませんが、笛作りが少年の慰めだったとも思えます。「うゝん、いやだァ、あれは」という少年の言葉に、「この笛だけは何といっても渡せない」という強い思いが感じられる、という感想が出ました。少年の頭越しに、大人が勝手に話を決めてしまったことが、一層少年の気持を傷つけたかもしれないという声もありました。もし、朱実が笛を作った少年に直接「いい音色だね」とか「自分で作ったの？」とか声をかけていたらどうだったろうかと、二人の少年の気持を想像し合いました。

今回、少国民文芸選『かさゝぎ物語』所収作と比較してみると、最終場面の吉麿（朱実のこと）の心情を示す表現に違いのある事が分かりました。『赤い鳥』版の朱美は、笛を取り上げられたショウガ売りの少年がどんなに怒っているかと考え、ただ泣くしかありませんでした。しかし、吉麿はあの少年が今どうしているだろうと、少年の立場を考えてあの時の泣き声を思い出しているのです。少国民文芸選『かさゝぎ物語』所収作は、『赤い鳥』所収作よりも少し年上の子どもを対象にしているという感じは、この「笛」にも当てはまると思いました。

次の『うぐひすの謡』所収「おどけ百人一首」は、森三郎自身が「あとがき」に「山東京伝作の黄表紙『小倉山時雨珍説』、同じく芝全交作の『百人一首戯講釈（おどけこうしゃく）』との脱化です」と書いてある通り、黄表紙風の滑稽が満載の話です。百人一首の作者の名前をもじり、柿本人麻呂（人丸）、猿丸太夫に昔話の「猿蟹合戦」の役を当てはめ、謡曲の「鉢の木」（「尋常小学国語読本」にも所載）や昔話「花咲か」などを混ぜこぜにして物語が展開しています。人丸が猿丸を討つ場面では「猿の尻は赤いな／牛蒡やいておっつけろ」という歌を歌っています。これは今の「猿蟹」には出てきませんが、京伝の『小倉山時雨珍説』には出ています（森銑三『続黄表紙解題』pp. 157-160 参考）。

森三郎はこれまでも黄表紙に題材を得て童話を書いています。「めぐりあひ」（『赤い鳥』一九三四年八月号）や『うぐひすの謡』所収の「ものぐさ物語」も唐来参和の黄表紙にヒントを得ていました（「かささぎ通信」114号参照）。森銑三の『読書日記』の一九三三年九月十日には参和の『再会親子銭独楽』、十三日には芝全交の『百人一首戯講釈』を読んだことが書かれています。三郎が兄・銑三の影響を受けて黄表紙の世界に惹かれていったと想像するだけでも楽しくなります。

次回予定　二〇二二年十二月九日（金）午後一時半〜三時半
①読み比べ「菊の花」（『赤い鳥』［1933.6］所収作と『かさゝぎ物語』［1942.8］帝国教育会出版部所収作）
②「波の鼓」（『うぐひすの謡』［1943.8］所収作）